

東京日々新聞

千十六号



書置の車。

書置の車が返る

人の思ふも恥しく只

合葬家火とやら我り

とよ焼死つゝ二人の者い添

どめて反と塚の我散り、秋月

光道信士、俗名大谷安五郎と悪文と

つゝねて柱に張るゝ困が裏の樂火と

移一茶花、何と焼酒の酔に乗とと瀧

園とつゝ寐て見三と燃盛る焰火の勢

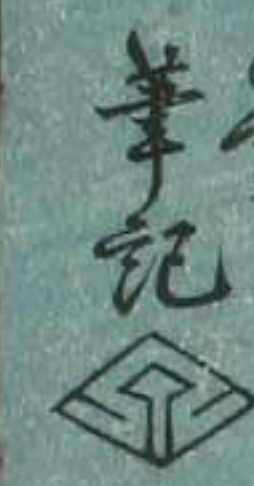
さ地くねて綿伴いゝて道は浪華まきりて

浦と一河内ノ國、淡田村の暮婦およでと

私通て算とよゆしよ入に安五郎

とら白痴漢ら

時と筆記



具足屋
ホリエイ

一萬
筆記

